五郎兵衛淵の話

大戸川の向かい岸に釜蓋という村があり、そこに釜蓋五郎兵衛という百姓が住んでいた。ある日、五郎兵衛は畑仕事をしていると、小さな蛇がチョロチョロと出て来て、五郎兵衛をじっと見上げていた。五郎兵衛は可愛く思って、その蛇を懐に入れて家へ帰った。

五郎兵衛と婆さんは味噌倉のかたすみに蛇を住まわせ、朝夕に食物を与えて大切に育てたので、一年も経つと蛇は一〇尺ほどにもなってしまった。あまり大きく育ったので、村人も恐れ、五郎兵衛はやむなく蛇を大戸川に放すことに決めた。

五郎兵衛は夜中に蛇を連れて大戸川に行き、

「今日までお前を我が子のように大事に育ててきたが、村の衆もあまり騒ぐものだからお前を養うことができなくなった。この川に住んでいつまでも長生きしろよ。」

と言って川に放した。

やがて大戸川に大きな淵ができ、その中に大蛇が住んでいるのを人々が見て、誰言うともなく「五郎兵衛淵」と呼ぶようになり、誰も近付かなくなった。しかし、五郎兵衛だけはその淵に自分の食べる物を半分にして淵に投げ入れ、大蛇の無事を祈っていた。

ある夏、婆さんが病気になって高熱が出たので、五郎兵衛

は大戸川の浅瀬を渡り、横手まで薬を求めに行った。帰って来ると朝からの大雨で大戸川は増水し、五間もない川幅が一〇間を越えるようになっていた。渡るに渡れず、五郎兵衛が難儀をしていると、丸木橋のようなものが浮かび上がったので、五郎兵衛は無事、大戸川を渡り終えた。

振り返って丸木橋を見ると急に二つに折れ、四つに折れ、八つに折れて波間に消えてしまった。五郎兵衛の育てた大蛇が助けてくれたのであった。婆さんは薬のお陰ですっかり良くなったと言う。